

特集 1

CAUA 設立 15 周年記念シンポジウム

インターネットはこうして始まった

～イノベーションと人材開発の今を考える～

パネルディスカッション

「イノベーションと人材開発の 今を考える」

コーディネーター

安東 孝二 氏

株式会社 mokha 代表取締役、CAUA 運営委員長

パネリスト

釜江 常好 氏

東京大学、スタンフォード大学名誉教授

後藤 滋樹 氏

早稲田大学 教授、CAUA 会長

小町 守 氏

首都大学東京 准教授

砂原 秀樹 氏

慶應義塾大学大学院 教授

安東 小町先生は、学生時代に企業でのインターンシップで様々な経験をされた。砂原先生が学生の頃は、このようにアプローチしている人はいましたか？

砂原 所属した研究室の先生が、学外で論文発表することや、企業との連携を勧めていたので、私は非常に恵まれていた。当時、インターンシップという制度は一般的ではなかったが、海外のカンファレンスに参加したこともあった。

安東 釜江先生、後藤先生は、当時若い研究者を見守っているという意識はありましたか？

釜江 私は、学生に先生と同じ研究はやらない方がいいと言った。なぜなら、物事にはライフサイクルがあり、もちろん100年続くような学問もあるかもしれないが、先生が面白いと思って青春時代に手がけたものは、若い研究者が育つ頃には面白くなくなっているからだ。私の弟子は、ありとあらゆる分野に散っている。ただし、博士を取るまでは先生のアドバイスを聞いた方がいいと言っている。

私も学生の頃は、インターンシップで、必修の実験単位を補ってもらい、卒業できた経験がある。

後藤 私自身が若い時代に見守られたという経験がある。私が学生の頃、日本中の大学で情報科学・情報工学の新しい学科を作るという議論があった。私は数学科の学生であったから、その流れがなければ、今のように情報通信に関わっていなかっただろう。その後、NTTの研究所に勤務していた時代には、違う分野を研究していた上司が毎月のように私の話を聞いてくれた。あえて部下の文句を聞いてくれた。非常に研究者を大事にしてくれる組織だと思った。その時の経験があるから、自分も若い人を見守り育てたいと思った。

安東 それでは、見守った立場の方も見守られていたということですね。では、現在情報システム系の学問で多少閉塞感があり、人材が出てこないのは、なぜでしょうか。

小町 世の中のフォーカスが変わってきていて、世代により興味が異なっているように感じる。そして、サポートしてくれる人との出会いが上手くつながっていないのではないかと。

安東 出会いが繋がっていない理由は何でしょうか。

砂原 カバーするエリアが広くなりすぎたのではないかと。ネットワークという分野も広くなりすぎている。それに、組織を股にかけて動く人が減っている。私は大学を移っても前の大学と繋がっている。所属している組織のために何かをするのではなく、組織を超えて面白いことをしたいと思う。組織の壁をどうやって取り払うかということに、意味がある。

釜江 海外の人は、自分が取組んでいることについて話す。しかし、日本人は、会社の企業観を話す。日本人も日本の企業も、個人の取組みを話せるようになると変わっていくのではないかと。

安東 オープンソースの活動も、日本では上手いかないことが多い。日本で関わっている人は、皆サラリーマンなので、家に帰っても時間がほとんどなく、あまり活動に時間をかけられない。しかし、アメリカでは、オープンソースの活動は、寄付で賄える。日本では寄付もなく、お金もないので、回らなくなる。最近では、自分たちでコミュニティを作ろうという動きが出てきている。しかし、組織の壁を超えるのは難しい。

アメリカの友人はセールスマンだったが、会社で非常に高い目標を設定され、達成率が9割だった時に、「こんなに高い目標設定をされたのに、9割も達成した。だから給料をあげてくれ。」と言った。隣の日本人は、「達成できなかった。」と言って、給料は上がらなかった。日本人とはアプローチが違うのだ。学術分野の若者には、守り過ぎの感がある。

小町 グーグルやヤフーに勤めている人は、勉強会で仕事に近い内容を話したり、業務時間外でも論文を読んだり、研究の実装をする人もいる。今は、研究室の中で話していたものが、ツイッターで他の大学の研究室ともつながっているようにも思える。ただ、物理的に居ることによって伝わるような何かは伝わらなくなってきていることも同時に感じる。

シリコンバレーでは、3ヶ月で辞めるのが普通で、3年働き続けるのはとても稀。日本でも、短期間で仕事が変わる人が増えている。それは、特定の会社で働いているというよりは、ある地域でそれに関する何かをやっているという意識で働く人が増えてきているとい

うことではないだろうか。しかし、その場所が日本では東京しかないことが残念である。

砂原 奈良県の生駒市でも、市役所の職員で大学や研究所を回って研究室や企業のマッチングをしている人がいた。その方によって、画像処理系の研究室とネットワークの研究室とでインターネット救急車を始めることができた。このようなインキュベーターがもっと必要である。

後藤 シリコンバレーでは、もし失敗してもその理由がきちんと説明できれば実績になる。そして、自分が成功したら、受けた恩を次の世代に返したいと思う。つまりメンターになりたいと思うのだ。シリコンバレーのサクセスストーリーの蔭では、このような共生関係が回っている。チャレンジするのはお金のインセンティブもあろうが、実際に成功した人に聞いてみると、他人にはできない事を自分がやるという手応えが大きな動機のようなのだ。

日本では、メンターのような人が動きにくい。それは、皮肉なことだがITのおかげで忙しくなっているからではないか。これまで分担していた仕事のやり方が変わる。例えば、今まで秘書がやっていた手紙のタイプも自分でやらなければならない。大学の雑用の爆発で忙殺される。大学では、秘書や技術職員を減らしていると思うが、その分だけ教員の予算申請や評価のための資料作りの負担は増えている。

釜江 アメリカの大学の先生は、9ヶ月分あるいは10ヶ月分しか給料をもらわない。残りの2,3ヶ月は、他大学や研究所、あるいは企業で働く。このような産学の交流が当たり前になっている。

後藤 日本の大学では、学部と同じ大学の大学院に進むことが多い。その大学院の出身者が教授になる比率が高い。他の大学院へ行くとお客さんのような扱いを受け、重要なことを任せてもらえない。日本では、就職も職業を選ぶというよりは、会社を選ぶことになっている。

アメリカで、Internet2と一緒に仕事をした時に、日本人は皆が掛け持ちで分担していたが、アメリカの担当は全員フルタイムだった。その中から役人になる人がいた。また別の分野から来る人もいた。日本では人材の流動性がない。これまでは安定でよかったかも

しれないが、今後は裏目に出るのではないかな。

安東 逆に、今は終身雇用制度もだいぶ崩れてきたので、これからよくなる可能性もある。

砂原 グローバルスタンダードの中でどうやって生きていくかだ。私の研究会の3割が留学生である。日本人もその中で戦おうとするが、元気を出す子と自信をなくしてしまう子に分かれる。

失敗できる環境は、絶対に必要である。日本では、社会に出てしまうと難しいので、大学では失敗してもいいと教えれば、失敗から学ぶこともでき、失敗してもいいということの意味が分かるのではないかな。これが、教育がやるべき1つの仕事だと思う。

発言者1 若手を育てるのに、コミュニティの役割が大きくなっているように思える。応用的な技術は、どんどん先端に行っているように思える。こういうコミュニティとアカデミックが上手くつなげられればよいのではないのでしょうか。

砂原 コミュニティと両方に所属しているアカデミズムは少ないように思える。私は、Mozilla ジャパンで理事を務め、日本UNIXユーザー会にも所属している。このようなコミュニティに大学の先生も積極的に参加すべきである。

釜江 日本の企業が夏季アルバイトで学生を雇う時の単価は、非常に安い。アメリカでは、十分生活ができるだけでなく、貯金ができるように配慮している。半分教育的な配慮を企業にもしてもらい、学生にとっても企業を知り、自分が持つ技術力も認められることで自信になる。

後藤 情報通信が発達すれば、地方でも何でもできると言われていた。実際は光ファイバーのコストは距離に比例するので、便利どころがますます便利になっている。大都市への集中は、東京だけでなく、アジア各国でも同じ傾向がみられる。しかし、集中しすぎることの弊害もある。この問題に対して、皆でアイデアを出して解決していかなければならない。

安東 さまざまな課題が出ましたが、現状を打開するためには何があるとよいのでしょうか

か。

小町 長期のインターンシップは重要であり、医学部や看護学部では、インターンとして1年間病棟で実習した後に、さらに2,3年間下積みをしてようやく一人前になるという仕組みがあるが、情報系にはない。アメリカでは、博士課程の学生がインターンシップで研究所に行き、そこで論文を発表することが普通に行われている。日本でも、情報系を学ぶ若者は博士課程まで進み、企業や研究所に長期間インターンシップで行くべきである。

砂原 日本のインターンシップは、アルバイトの延長のような、安いお金でこきつかわれるものしかないように思える。私は、学生をとにかく好きに使ってください、教育してやってください、と企業にお願いをしている。大学側でも、その代わりに大学の単位にして、授業の出席を免除する等の制度は整えなければならぬと思っている。

後藤 インターンシップには、さまざまなものがあり、企業によってその内容にばらつきがあるようだ。ただし、昔から学生が学外で学ぶ機会があった。この仕組みを大きく変えなくても、少しずつ工夫してきた方々がいるおかげで今がある。将来の展望を得るためには、皆が楽しみながら考えを少しずつ変える工夫をすることが必要だろう。

釜江 日本でもインターンシップの制度があるが、充実度は低い。アメリカでは、大学の学費が高いので、夏休みに学生がインターンシップに参加する場合、かなりの貯金が残し、高額授業料の足しになるように金額面でサポートする。以前、アメリカの大学にいた時に、月30万円払うならポスドクを雇いたいと言ったところ、学生がそれを貯めて授業料の足しにするのだから、それを理解しなさいと同僚に言われた。この考え方が、少しずつでも日本で広がっていけばいいと思っている。

安東 ありがとうございます。少しずつ変えていけば何かが変わるような気がします。これで終了とさせていただきます。

※注記：本文は、2014年6月19日のCAUA設立15周年記念シンポジウムにおけるパネルディスカッションの内容を、CAUA事務局にて取りまとめたものです。従いまして文責はCAUA事務局にあります。